

カラスから牛を守る、感染症からも守る

根室北部事業センター 第二家畜診療課 獣医師 佐野 麻衣

カラス被害が多発する今の時期

「カラスに突かれて乳房から出血している」「生まれた子牛が舌をとられて弱っている」など様々な野生動物による被害が発生しています。当センターの管轄内だけでも、カラスによる「鳥獣害」は2016年1月～2017年12月までの2年間に45件発生しており、そのうち48・9%が死亡・廃用となっています。目に見える被害がなくても、カラスが牛舎内にいることで牛の横臥時間が短縮し生産性が低下するともいわれています。2～4月にかけてはカラスが暖かい牛舎に集まりやすく、春の繁殖に備えて活発に活動するため、この時期は特に注意が必要です。そこで今回はカラスを中心に、対策法と被害にあった際の緊急対応法についてご紹介します。

カラスの生態を理解し対策を考える

牛舎に出現するカラスの98%がハシブトカラス(写真①)であり、2～4月に繁殖期をむかえこの時期は家族で行動しています。畑などの平

地ではなく立体的な構造を好み、肉類を好む食性であることから牛舎に集まると考えられています。カラスは非常に賢い動物であり、一度学習したこと(人の顔、餌の情報、畏など)を一年間記憶することができま す。そのため様々なカラス対策は数日間効果があってもすぐに学習され、かいくぐられてしまいます。広く使 われている対策(コンパクトディスク、テグス、爆音器、防鳥テープ等)は、必要な時期・期間にだけ設置しカラスに慣れさせないようにすること、近隣の農場と話し合い違うものを設置することが大切です。一方カラスは嗅覚や味覚が弱いいため、匂いや味を利用した対策はあまり有用とはいえません。やはり重要な

は「物理的に」防除するということです。牛舎の入り口に侵入防止ネット(写真②)を設置すること、死亡した個体や傷口等は黒シートで覆うこと、後産等はすぐに片付けるなど、カラスの好む場所・物に近づけないようにすること、見えないようにすることが重要です。

万一、牛が被害にあってしまったら…

カラスは弱った牛や子牛の皮膚、柔らかい組織(目、乳房、陰部など)を突き傷害、食害することがあります(写真③)。傷口から出血し、細菌が体内へ侵入して重篤な敗血症となることもあります。傷口を見つけたら獣医師の診療を受けましょう。多量に出血している場合はクリップなどで周囲をつまみ、獣医師が来るまでにできるかぎり止血してください



▶写真① ハシブトカラス
嘴が太く「カア、カア」澄んだ声で頻繁に鳴く



▶写真② 侵入防止ネット
簾状、カーテン状など



▲写真③
傷害された牛の皮膚の傷口

い。獣医師の到着後速やかに止血処置を行えるよう、場所の確保や粹場への移動、器具を置く台・洗浄用のぬるま湯・手元を照らすライトなどを準備していただけるととてもスムーズです。出血を認めない場合は患部を洗浄し、カラスに傷口が見えないよう被覆するか、カラスが侵入できない場所へ移動しましょう。カラスは一羽が傷害したあと、グループで飛来しさらに傷口を攻撃するケースもあるためこのような対処が必要です。なお傷口に蹄病軟膏など強い臭い・味のするものを塗布しても、カラス除けとしての効果はないようです。

感染症媒介動物としての危険性も

カラスによる被害は牛への直接被害

害だけではありません。盗食や水浴びで飼槽・水槽周囲を汚染することもあり、サルモネラ菌やボツリヌス菌などの感染症媒介動物としても危険です。道内のハシブトカラス74羽の糞便等のサルモネラ菌検査では、10・8%から牛と同じ血清型のサルモネラ菌が分離されたという研究報告もあります。カラスは一日に70kmほど移動するため、感染症防除の観点からみても地域全体におけるカラス対策の意識向上が必須です。自分の牛・飼料を守ることが、地域の牛の感染症予防へもつながります。

おわりに

冬・春は若いカラスが十分な餌をとれないため、牛舎が安定した餌の供給源とならない限り、地域のカラス生息数の増加を防ぐことができると考えています。対策不足が結果としてカラスを「養ってしまふ」ことがないよう、近隣農家と一致団結し根気強い対策が必要です。